国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

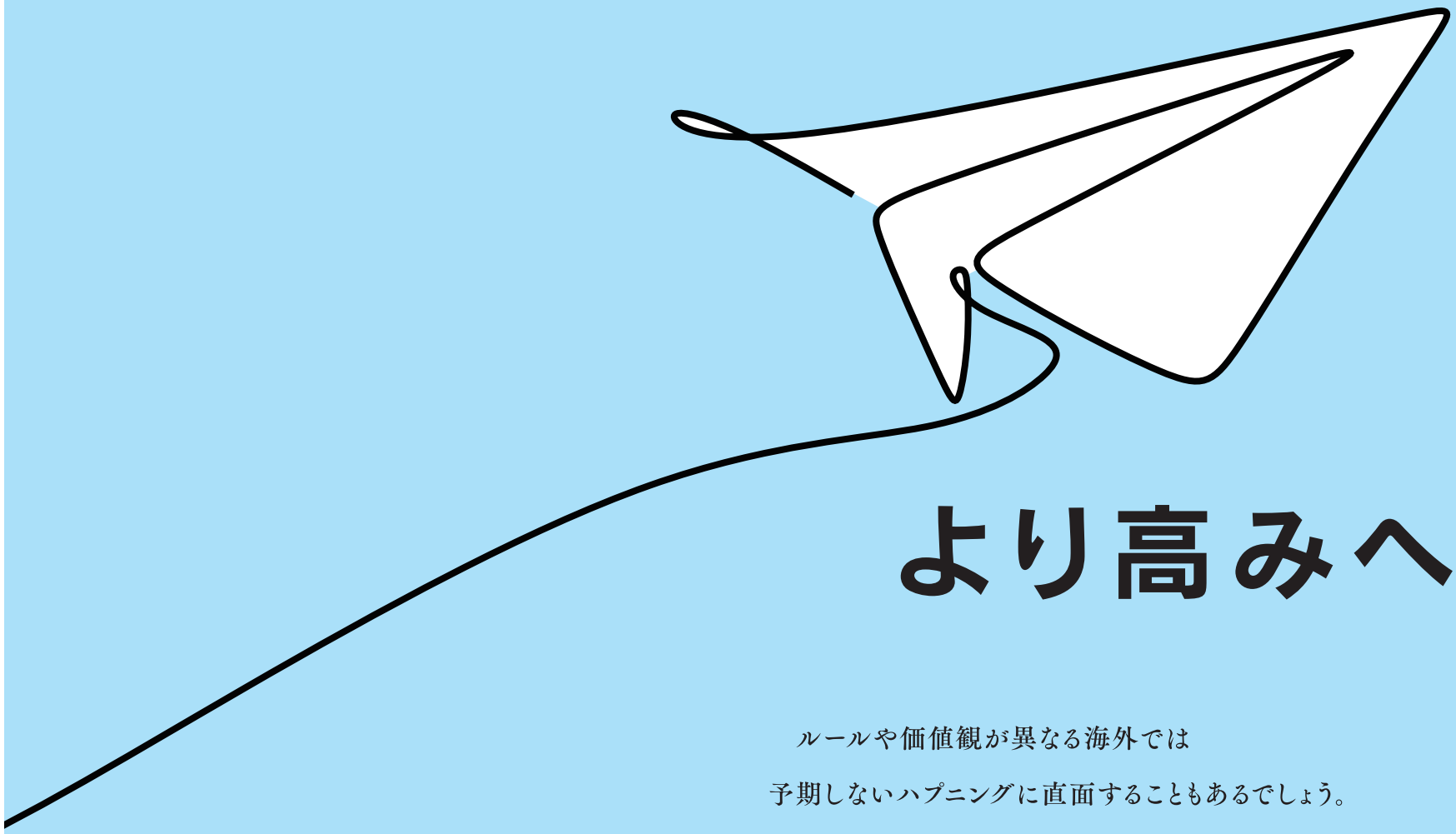
Nagasaki University
Choho

人を結ぶ　地域と繋ぐ
［長崎大学チョーホー］

Web Choho

Vol.87
2025年3月1日発行

「人を結ぶ　地域と繋ぐ」をコンセプトに、長崎大学の思いや姿、描く未来などを共有し、多くの皆さまに長崎大学へ関心をお寄せいただけるような広報紙を目指します。



より高みへ

ルールや価値観が異なる海外では
予期しないハプニングに直面することもあるでしょう。
しかし、そういうチャレンジの繰り返しの先に
今までなかった新しい自分が見えてきます。
今号では、留学を通して他国の文化や習慣を学び、
自身の大きな強みとした卒業生や在学生、
さらに海外から本学に留学中の学生にお話を聞きました。
三者三様の体験をご紹介します。

Beyond the Sky

［長崎→ベルギー王国］

Belgium

実感がなかった「世界」を自分の目で見て確かめる

古河電気工業株式会社に勤務。洋上風力発電向けのケーブルや付属品の販売、設置などの営業を担当されています。この春には入社3年目を迎えます。

TAKEDA Natsuki

武田菜月さん　2023年度　経済学部卒業生

留学先：モンス大学（2020年1月～3月、2021年9月～2022年6月）

福岡県田川市で生まれ育った武田さんにとって、海外はテレビで見るだけで実感のないものでした。カッコいい。そんな憧れはあっても、実生活と結び付く機会はありません。「世界で起きていることを自分の目で確かめたい。大学生になったら留学したい」。強い信念を持って本学に進学し夢の実現に向けて準備を進める中、予期せぬさまざまな問題に直面します。自身の性格を「頑固で負けず嫌い」と分析する武田さんは、どのように壁を乗り越え成長したのでしょうか。

両親は留学に反対！プレゼンで説得を試みる

最初の壁は留学に反対する両親の説得でした。「なぜ留学をしたいのか、PowerPointにまとめて両親にプレゼンしました。良い高校に行けば良い大学に行ける、良い大学に行けば良い企業に就職できる。でも自分が思うより世界は広く、留学してもっと視野や価値観を広げたい。そう説明し、留学費用の返済計画も示しました。このプレゼンが功を奏し、両親もなんとか了承してくれました」。

留学先にベルギーの大学を選んだのは、ヨーロッパの中心に位置し、EU本部があるから。さまざまな国籍の人たちと交流できると考えたそうです。ところが滑り出しは順調とは言えませんでした。

「日本にいる時は英語ができる方だと思っていたんです。実際はまったく違いました。授業にも他国の留学生との会話にもついていけず、一緒に留学した友人と自分を比べる毎日でした。英語ができないと思われているんじゃないかと疑心暗鬼になり、授業中に泣いたこともありました。何を言っているのか分からないのに、作り笑いをしている自分が嫌で嫌で悔しかったです」。

折しも、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めていた頃でもありました。渡航3カ月後、大学から帰国を促され、あえなく帰国の途に。踏みとどまって頑張るという決意も、その志半ばで閉ざされてしまいます。

目的を達成するまで大学は卒業できない

復学しても長崎には住む家もない武田さんは、大学に直接交渉をします。西町にある、留学生向けの居住施設「国際交流会館」への入居を願い出たのです。「留学するために長崎大学に来たんです！」、「留学するまで大学は卒業できない！」という熱意ある訴えを大学もくみ取り、入居を許可。留学生と生活を共にする中で、英語を使ったコミュニケーションにも自信が持てるようになったといいます。そして、新型コロナウイルスが終息する気配はなく、留学を諦め、就職活動に専念する友人たちも出始める中、武田さんはご両親に二度目の説得を試みます。「再び留学する場合、卒業が1年遅れることになるので、やはり両親は反対でした。けんかになってしまったので、今度は自分の考えを整理し、文章にまとめて読んでもらいました」。

1回目は学生寮、2回目はシェアハウスで、現地の学生や留学生と共同生活を送りました。

二度目の留学もベルギーへ。大学院生に交じってマーケティングを学ぶ武田さんに不安や迷いはありませんでした。そんな時、大きなトラブルに見舞われます。「旅行先のメキシコでパソコンを盗まれてしまい、帰国後に向けて行っていた就職活動のオンライン面接を受けられなくなったんです。さすがにパニックになりました。それを助けてくださったのが、経済学部の丸山真純先生です。キャリアデザイン／キャリア教育がご専門で多文化社会学部の白井章詞先生を紹介してくださいました。先生との対話を通じて気持ちを整理することができ、海外留学経験を生かすことができる企業を紹介していただきました」。

帰国後、日本を代表するグローバル企業2社から内定を獲得。白井先生が企業にお話を聞いたところ、武田さんの行動力とバイタリティーを非常に評価されていたそうです。留学を通じて世界に身を置いたことで、もともと持っていた信念の強さが、社会に出ていくための自信となり、成長につながったのでしょう。

武田さんは最後にこう言いました。「私は自分の目で見たことしか信じないと自分に言い聞かせています。だから積極的に世界に身を置き、殻を破ることができました。世界中に友人ができたので、これからも広い視野を持ち続けながら、世界を見ていきたいと思います」。

応援者からのメッセージ　父・武田健一さん

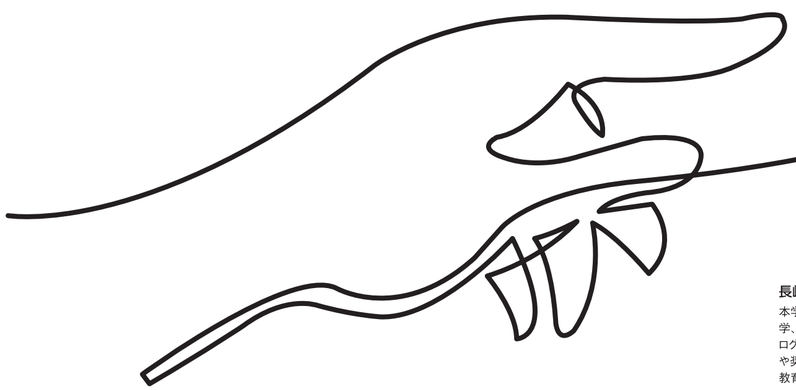
留学に反対したのは、手の届かない所に行ってしまうような寂しさと、新型コロナウイルスのこともあったので、「もし何かあったら」という不安が大きかったからです。二度目の留学の時には「他にも学ぶ方法はあるのではないか」と責めたことを反省しています。「広い世界に身を置いて今しかできない学びに挑戦したい」という強い思い、理解してもらいたいと真っすぐに向き合おうとする姿に、我が子ながら敬服しました。

彼女は大きく成長しました。既成や慣習にとらわれず、柔軟に物事を見て判断し対応する力を伸ばすことができたからでしょう。それは「広い世界」からこそ学ぶことができるものだと思います。見守りながら、親としても成長させてもらったことをありがたく感じています。

応援者からのメッセージ　キャリアセンター（多文化社会学部 兼務）白井章詞 准教授

留学中に海外で就職をするのか日本で就職するのか悩み、その結果、就職活動を始めるのが遅くなっていました。相談や情報交換ができる友人がいなかったことも、不安を大きくしているように見えました。将来に対する考えや就職活動についてヒアリングし、不安の解消と帰国後の就職活動の進め方について一緒に考えました。帰国前に本学卒業生と面談できる機会を設けたのは、留学生は短期間のうちに選考を受けなければならず、企業研究が浅くなりがちだからです。

大人世代は、若者がいろいろな国籍の学生と時間をかけて交流してきたことで、何を感じ学んだのか、そしてこれからの人生にどのように生かしていきたいと思っているのかに興味を持っているようです。ぜひ、大人世代に武田さんの学びをシェアしてください。



長崎大学の留学支援

本学は留学を考えている学生のために、海外短期語学留学、各学部や研究科が実施するプログラム、交換留学プログラムなどの留学制度を設けています。英語学習支援や奨学制度の紹介といったサポートについても、留学生教育・支援センターが中心となって行っています。

Message

伊東昌子 理事（学生・国際担当）

可能性がある限り、留学にはチャレンジしてほしいと考えています。学生だからできる体験を逃してほしくありません。経済的な心配については奨学金が数多くあり、自分で探すことも大学から紹介することもできます。

他国の文化・常識を知ることで自分や自国について理解できるようになります。自分の中の常識と非常識がぶつかることをきっかけとして、新しい何かを生み出してくれればと思います。留学先では知恵を絞って解決する力も身に付けてほしいですね。自分から働きかけて人脈を広げたり、人に頼ったりすることも恐れずに体験してください。

留学中はノートを取る際にも英語を使うよう心がけました。

留学前年の夏に、海外の提携校から環境科学部に留学生を迎えて実施された「環境サマースクール」にも参加しました。

［長崎→タイ王国］

環境をテーマに垣根を越えてつながる世界

Thailand

TAKEHARA Kiri

竹原妃利さん　環境科学部4年

留学先：マヒドン大学（2024年2月19日～3月22日）

本学では、独自の留学プログラムを設けている学部があります。語学修得を主な目的とした短期留学と比べて、より専門性の高い学びを得られる点が魅力の一つ。環境科学部で実施されている「短期国際環境フィールド研修」も、世界の学生とグローカルな環境問題について共修することを目的としたプログラムです。昨年、本プログラムに参加した竹原妃利さんに話を聞きました。

「留学期間は約1カ月で、講義やグループワーク、フィールドワークを体験しました。講義は14コマあり、水や森林問題など幅広いテーマについて現地の先生方から学ぶことができました。私自身、卒業研究では大気環境と薬用植物の成分変化の関係について取り組んでいるため、植物系の講義が特に興味深かったです。これまでの自分の研究とは異なる視点から問題提起されていて、研究の醍醐味を再確認する機会にもなったと思います」。

その一方で、現地の学生と行ったグループワークでは反省点もあったのだとか。

「タイの学生は、自国が抱えている環境問題について現状を明確に発言できます。私たちは1年生の講義で習ったかな？その程度の情報量しかないのとは対照的でした。講義の内容やディスカッションの精度など、現に環境問題が発生しているフィールドに行けたからこそ見えた視点から学ぶことで、プログラム参加者は、帰国後の学びへの向き合い方が変わったのではないでしょうか」。

環境という壮大かつ難しいテーマだからこそ、「面白い」と感じることが研究の原動力になります。留学を通じて新しい視点を得た竹原さんは、この春、本学の大学院に進学することを決めました。

キャンパス内で樹木の幹や高さを計測。森林の炭素含有量を調査しました。

Nagasaki

［ナイジェリア → 長崎］

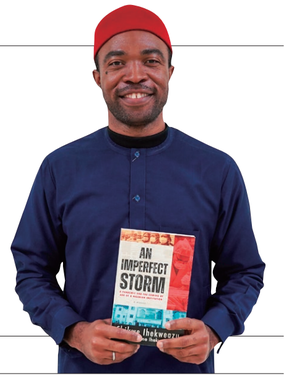
思い描いているのは新しいリーダー像 母国の公衆衛生に変革をもたらす

Emmanuel Ifechukwude BENYEOGOR

エマニュエル・イフェチュクウデ・ベンヨゴールさん

プラネタリーヘルス学環　長崎Doctor of Public Healthプログラム　3年

留学期間：2022年9月～2025年9月



エマニュエルさんが自身の誕生日に学環に寄贈した本。「いつもサポートしてもらっている皆さんへ、感謝の思いを込めて贈りました。著者は元NCDC長で現在はWHO事務局長補佐のChikwe Ihekweazu博士です」。

エマニュエルさんの母国ナイジェリアの人口は約2億人。アフリカ最大の経済規模を誇ります。その一方で、マラリア、HIV、ラッサ熱、黄熱病などさまざまな感染症との戦いの歴史があり、その戦いは現在も続いています。

ナイジェリア政府は2011年にナイジェリア疾病予防センター（NCDC）を設立しました。公衆衛生エマージェンシーマネージャーとしてNCDCに在籍していたエマニュエルさんは、2022年に長崎へ。プラネタリーヘルス学環の博士後期課程「長崎Doctor of Public Health プログラム（DrPH）」に籍を置き、2025年9月までの3年間で博士（公衆衛生学）の学位取得を目指しています。そもそもエマニュエルさんは、なぜ本学を留学先に選んだのでしょうか。そこには、発展途上国が抱える深刻な問題が関係していました。

HSR2024にて。翻訳や学環との連絡など、普段からサポートしてくれているプラネタリーヘルス学環2年生のヘンカー寛子（Hiroko Henker）さんと共に。「他にもたくさんの方がサポートしてくださっています」。

「ナイジェリアには、想定で54の重大感染症が存在します。しかし、国が感染症対策にかける予算は全体のわずか5％程度。もともと私は臨床医になるはずでしたが、現状を目の当たりにすればするほど、この国をコントロールするには医学よりも先にリーダーシップやマネジメント力が必要だと感じるようになりました。予算に対する国の方針はなかなか変わりません。それだったら別の角度から資金を生み出す手法を見つけ出し、母国の感染症対策に貢献したい。長崎大学には、日本で唯一プラネタリーヘルスに特化したリーダー育成のプログラムがあります。ミッションを完了するための環境が整っていると思いました」。

現在、医療機関が排出する二酸化炭素について、長崎大学病院に対する調査などを踏まえデータ分析を行っているエマニュエルさん。本学での研究実績を足掛かりにして、将来的には自然保護と経済の二つの観点から、母国の感染症対策につなげようとしています。

「例えばラッサ熱は、50年もの長い間、感染拡大が後を絶たない重大感染症です。理由は、収穫を終えた農家の人たちが、不要になった稲などを農地で燃やしてしまうからです。自然界を追われたネズミが人家に逃げ込み、そのネズミを媒介して感染が広がります。畑を燃やさないでほしい、自然を保護してほしいと専門家が訴えても聞き入れてはくれませんが、農家に給付金を支給できるようになれば抑止力になるでしょう」。

プラネタリーヘルス学環設立後、学生第1号となったエマニュエルさんの研究成果に期待が寄せられています。「期待はプレッシャーではなく信頼だと思っています。だから私はその思いに応えたいです」。

Message

平山謙二
プラネタリーヘルス学環長

プラネタリーヘルスとは、これからの持続可能な地球上の生態系や社会のあるべき最適な姿を模索することです。環境破壊や社会不安を学術的に研究し、その原因と対策を明らかにします。その目指す先には、次世代のための幸福な世界があります。多くの国や地域から長崎大学に集った皆さんは、お互いに異文化を尊重し、人類共通の希望を実現するためにさらに切磋琢磨してください。長崎大学は、皆さん一人一人の成長と将来のキャリアパスを常に支援し続けます。

プラネタリーヘルス学環

社会学、経済学、工学、環境学、医学、データサイエンスなどのそれぞれの専門家が学問領域を超えて地球規模の課題に取り組み、俯瞰する力と実行力を備えた実務家リーダーを養成する全学的組織。2022年に設置され、最初に「長崎Doctor of Public Healthプログラム（DrPH）」が開講しました。DrPHは、公衆衛生に変革をもたらすリーダーを育成する高度専門教育プログラムです。

Ukraine

［Report］

ウクライナ避難民学生のその後

本学では、修学が困難になったウクライナの学生たちに学びの場を提供することを目的として、2022年5月～10月の間にウクライナから18人の学生を受け入れました。その学生たちの今をご報告します。

現在も長崎大学に在籍している学生・11人

2023年4月と2024年4月にそれぞれ3人ずつ、計6人が母校の卒業資格を取得した後、本学の多文化社会学研究科博士前期課程を受験して合格し、現在は正規留学生として入学し、研究を続けています。その中には成績優秀で海外でのインターンシップに選抜された学生もいます。

さらに1人が熱帯医学・グローバルヘルス研究科博士前期課程を受験して合格し、2024年10月より正規学生として在籍しています。

残りの4人は特別聴講生として、学部の講義や日本語の講義を受講しています。母校の卒業資格を取得した後は、大学院の受験や日本での就職、帰国などそれぞれの希望に応じてサポートしていきます。

本学に在籍している学生に対しては、授業料や寮費を免除し、生活費の支給支援を継続しています。

他大学へ移籍した学生・5人

5人の学生が、自分の学びたい学部がある、住みたい場所があるなどの理由で、主に東京や大阪の大学に移りました。

帰国した学生・2人

2人の学生が帰国しました。ウクライナ政府機関への就職にチャレンジしている学生もいます。

Research
［研究］

研究に関する情報はこちらからもご覧いただけます。

URA

University Research Administrator

ユニバーシティ リサーチ アドミニストレーター

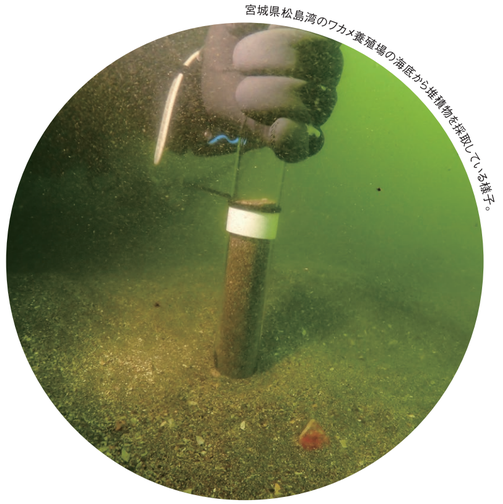
大学において研究者の研究環境整備や、研究開発マネジメントの強化などを担う専門職です。研究戦略立案、外部資金の獲得支援、共同研究相手のマッチング、研究プロジェクトの運営管理、研究成果で生み出された知的財産の管理・活用、研究の国際化に伴う安全保障管理など、業務は多岐にわたります。研究者と事務職員に加え、大学における第三の職種と呼ばれている新しい仕事です。長崎大学では14名ほどのURAが在籍し、長崎大学の研究力の強化、研究活動の活性化を図り活躍しています。

URAが推す長大の研究

海藻養殖を脱炭素の切り札に

食べられるブルーカーボンの創出を目指して

Text 王（ワン） 鴻香（ホンシャン）　主任URA　研究開発推進機構　研究推進部門　学術研究支援室



宮城県松島湾のワカメ養殖場の海底から堆積物を採取している様子。

ワカメやオキナワモズク、コンブやノリなどの海藻は日本の伝統食材で、私たちの健康を増進することで知られています。では、海藻のもう一つの力である、二酸化炭素（CO_2）を吸収して炭素を貯留する能力をご存じでしょうか？　今、脱炭素の切り札として、海藻のそうした能力に対する期待が高まっています。

とはいえ、海藻のCO_2吸収・貯留のプロセスは複雑でデータが乏しく、貯留量の定量評価法の確立が喫緊の課題です。この難題に取り組み、脱炭素という地球全体の課題に立ち向かっているのが、長崎大学海洋未来イノベーション機構の西原グレゴリー直希教授による「海藻養殖漁場におけるブルーカーボンの高精度定量化と固定能評価」研究※です。

西原グレゴリー直希教授

海藻が茂る沿岸の浅海域を藻場（もば）といいます。藻場は浅海域の生態系を支えるだけでなく、そのCO_2貯留能力は面積当たりで熱帯雨林をはるかに超えるとされています。しかし、昨今の海水温の上昇や藻食性動物の食害などによる「磯焼け」が生じ、藻場が次々と姿を消しています。西原教授はこれまでも磯焼けの原因究明や藻場回復をテーマとし、学生と共に長崎県の新上五島町、小値賀町、大村湾の海に潜って研究を続けてきました。そして、海藻類の大量養殖コア技術の開発と生産拠点形成実証研究を宮城県、福島県、沖縄県で行っています。それらの実績が今回の研究の土台となりました。

海藻は、光合成により海水中のCO_2を吸収し、炭水化物を生成します。海藻が生成した炭水化物の炭素は有機炭素とも呼ばれ、海洋生態系によって吸収され、100年以上も貯留される有機炭素のことを「ブルーカーボン」と呼びます。西原教授の研究チームは、海藻養殖場直下の海底にこの有機炭素が蓄積していることを発表していますが、海藻が生成した有機炭素のうち、どの程度が海底に貯留しているのか、さらに貯留している有機炭素は海藻由来のものかについては、まだ十分な科学的データがありません。

西原教授らはそれらを調べるため、海藻の中でもオキナワモズクやワカメなどの褐藻類に豊富に含まれるフコイダンという炭水化物（硫酸化多糖類）に着目しました。サプリメントでもその名前を聞くフコイダンは、褐藻類の細胞壁や粘質物に含まれる炭水化物の一つで、自然界で分解されにくいとされています。つまり「モズクやワカメが生成するフコイダンは炭水化物の中で最もブルーカーボンになる可能性が高い」と西原教授の研究チームは考えたのです。そこで、海藻、海水、堆積物に含まれるフコイダンを検出して分析する高度な技術を開発することで、海藻が光合成により生成した有機炭素の量、海水への流出量、堆積物への貯留量の高精度定量化を目指しています。

この研究のフィールドを沖縄県のオキナワモズク養殖場と宮城県のワカメ養殖漁場に設定し、5年間の研究プロジェクトが既に始まっています。「海藻養殖は食料供給にとっても脱炭素にとっても有効な戦略であることをこの研究で証明し『食べてもよいブルーカーボン』を生み出したいですね」と西原教授は笑いながらその意気込みを語ります。西原教授の研究が切り札となって、脱炭素の最も強力な手法の一つに海藻養殖が加わることが期待されています。

※西原教授が代表者を務めるこの研究は、2024年に独創的で科学技術イノベーションに大きく寄与し国際的にも高い水準の研究を支援する、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業「CREST」というプログラムに採択されました。これは、本学初の快挙です。

五島列島の中通島有川港に生息しているワカメやアカモクの海藻藻場（撮影日：2023年2月27日）。

Saiyu Fund
［西遊基金］

寄附に込める想い

仲間たちが支えてくれた宝物のような4年間

1984年　薬学部卒業　内海（うつみ）美保さん

実家が薬局を営んでおり、薬剤師になるために長崎大学の薬学部へ進学しました。ところが、数学と化学が大の苦手だった私。なんとか入学は果たしたものの、大学での勉強は本当に大変でした。当時の薬学部は4年制で、卒業までクラスの顔触れは変わりません。同級生の中には、授業料から生活費まで自力で工面している人もいるなど、育ってきた環境はバラバラでしたが、みんな仲が良く、誰かの為に手を差し伸べることを厭わない人ばかりでした。

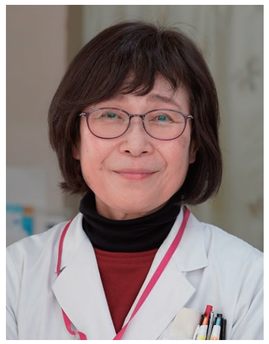
仲間に支えられながら4年生になった私は、実験と卒論、国家試験の勉強に取り組む多忙な日々に行き詰まり、誰かと目が合うだけで涙がこぼれ落ちるほど追い詰められていました。そんな中、国家試験の合否を予想していた先輩たちの「内海は大穴だから大丈夫。落ちても気にするな」という言葉で大いに発奮、国家試験に合格し薬剤師になることができました。現在の薬局に勤めるようになって33年が経ちます。そして、60歳を過ぎた現在も地域の皆さんのお役に立てればと日々奮闘しています。

今の私があるのは、大学時代に支えてくれた同級生や先輩たちのおかげです。勉強は大変でしたが、文化祭やゼミの旅先で撮影した写真を懐かしく見返すと、どれも本当に楽しそうに笑っています。

かけがえのない出会いと経験の場を与えてくださった長崎大学に、できる今こそ恩返しをしたい。それが今回、西遊基金に寄附を決めた一番の理由です。長崎大学には少子化の波を乗り越え存続して欲しい。そのためにも世界へ羽ばたく人材の育成に僅かではありますが、活用して頂けると嬉しいです。

実は、取材のお話をいただいた時に最初はためらいましたが、これを見た卒業生が学生時代を振り返り、子や孫のような学生の未来に夢を託して応援するきっかけになればとの思いでお引き受けしました。

寄附後、永安学長からお電話があり「時々でいいので長崎大学のことを思い出してくださいね」と懐かしい長崎弁でお言葉を頂きました。宝物のような4年間を過ごした母校のことを、私は誇りに思っています。これからも思い出とともに心の中にあり続けます。


内海さんは広島県のご出身。広島県福山市を中心に、県内外でチェーン展開している「サン・メディカル薬局」に勤務されています。大学時代には長崎大水害を経験。住んでいたアパートが水没しそうになった時に近所の人に助けられ、九死に一生を得たそうです。

薬学部生だった頃、級友の皆さんと一緒に撮影（後列左から5人目の眼鏡をかけた女性が内海さん）。クラスオリジナルのユニホームを着用しており、仲の良さが伝わってくる一枚です。

Event Report

世界と日本をつなぐ交流の架け橋に、あなたのご支援を

長崎大学には、故郷や親元を離れて遠い異国の地から入学する留学生がたくさんいます。西遊基金では、慣れない土地での生活を始める留学生が日本文化に触れ、日本人学生や教員、地域住民の方々と交流する場として「国際学生文化交流会※」の開催を支援しています。

今年度は、9月に日本の夏祭り、12月にお正月をテーマとして、2回開催。留学生や大学関係者に加え、近隣の高校生など約400人が参加しました。ちょうちんやライトで飾られた会場では、かき氷や焼きそば（9月）、お雑煮や年越しそば（12月）などの料理が振る舞われ、留学生が日本の季節や伝統文化を感じられる機会となりました。

9月の催しでは、特設ステージで、純心女子高等学校の生徒による空手や合唱、大学サークルによるチアリーディングやよさこい、留学生による日本舞踊が行われました。また、12月の催しでは、母国の年末年始の風習などについて紹介があり、文化や言語の垣根を越えた交流が生まれました。

この交流会は、留学生と日本人学生が絆を深めるだけでなく、大学周辺の皆さまの国際理解と国際交流を促進する場にもなっており、留学生からは「長崎、そして日本で自分の夢を実現するための重要な機会になった」との声を多くいただきました。

長崎大学では、今後もこういったイベントを開催していきたいと考えていますので、皆さまのご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

※本交流会は、「ながさきピース文化祭2025」の応援事業です。

（左）工学部2年　小川雄世さん
（中）工学部2年　和田晴希さん
（右）工学部2年　梶島啓斗さん

男子バスケットボール部（全学）

スポーツドリンクで熱中症対策!

この度いただいたご寄附は、スポーツドリンクの購入費に充てさせていただきました。夏の体育館の練習では、塩分補給が欠かせないのでとても助かりました。11月に行われた全九州バスケットボールリーグ戦では惜しくも敗退してしまいましたが、新体制に移行し練習試合を積極的に組むなど、2部昇格を目指し一生懸命練習に励んでいます。皆さまからのご支援への感謝を忘れず、部員一同精一杯練習に取り組んでいきます。引き続きよろしくお願いいたします。

硬式野球部

練習用のボールを購入! 2部リーグで優勝し1部昇格を目指す

私たちの部は指導者が不在のため、学生自身が練習メニューの組み立てからチーム運営まで行っています。野球だけでなくさまざまな活動を通して、人として成長することを目指しています。いただいたご支援は、野球ボールなどの練習道具の購入に充てさせていただきます。練習環境が充実することで、より効率的な練習に励むことができることを、大変うれしく思っております。昨年9月、10月に実施された「第112回九州地区大学野球選手権北部ブロック2部リーグ」では、5位という悔しい結果に終わりました。この悔しさをバネに、練習に全力で取り組みます。4月から始まるリーグ戦では2部リーグ優勝、1部昇格を目指します。

薬学部2年
キャプテン
溝口 陽介さん

サークル応援サイト

ありがとう先輩!

Choho Vol.86の「助けて先輩!」を見てくださった先輩から、
サークル活動支援基金を通じてたくさんのご支援をいただきました。
ありがとうございます!
今回は私たちから先輩へ、感謝の想いを伝えます。
※長崎大学では、学生団体への支援を受け入れるための
サークル活動支援基金を設けています。

教育学部1年
松尾泰志さん

（右下）経済学部2年　山内樹人さん
（左下）多文化社会学部2年　峯汰一郎さん
（右上）多文化社会学部2年　今村臻さん
（上中）教育学部1年　大原りぼんさん
（左上）工学部1年　中尾泰人さん

長崎大学軽音楽部
Swing Boat Jazz Orchestra

新しい楽器を購入!

いただいたご寄附は、楽器の整備や新しい楽器の購入、今後の活動費用に充てる予定です。11月には、OBやART CROW JAZZ ENSEMBLE、Art Crane JAZZ Orchestraの皆さまとビッグバンド演奏に参加させていただきました。幅広い年代の方々との演奏はとても楽しく、貴重な経験になりました。これからの練習では、定期演奏会やライブに向けて、さらに技術を磨き、演奏の完成度を高めるべく、全員一丸となって精一杯取り組んでいきます。Swing Boat Jazz Orchestra一同、皆さまのご支援に感謝しております。

New Fund

西遊基金に新たに二つの支援事業基金が加わりました

① 医学科教育事業基金

医学部医学科生の教育支援を目的とした基金を新たに創設しました。ご寄附いただいた資金は、医学科生がより充実した教育環境で学べるよう、教育プログラムの拡充や最新設備の導入に役立てられます。

医療の未来を支えるため、ご寄附をどうぞよろしくお願いいたします。

② ながさきピース文化祭2025 学生応援基金

来年度、長崎で開催される「ながさきピース文化祭2025※」に参加する学生への支援を目的とした基金です。ご寄附いただいた資金は、関連イベントに参加する学生の支援に役立てられます。

本学学生の文化・芸術振興活動のため、ご寄附をどうぞよろしくお願いいたします。

※本学は、「ながさきピース文化祭2025」のオフィシャルサポーターです。

卒業生イマナニシテル!?

卒業生の思い出や現在の様子を知ることができる「卒業生イマナニシテル!?」が『Web Choho』限定で公開されています。皆さまのお知り合いが登場するかもしれません。
また、記事投稿も随時募集しております。ぜひご覧ください。

https://choho.nagasaki-u.ac.jp/tag/alumni/

西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、さまざまな問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援と、教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。
TEL：095-819-2155

私たちの思い出の場所

レストラン＆カフェ

ひいらぎ　北川昭和（あきかず）さん

思い出の場所募集中!

名物ママから受け継いだ65年の歴史

深夜までステーキやトルコライスが食べられるレストランとして、1960年に創業しました。今年で65周年を迎えます。創業者である私の母は、豪快かつ強烈な個性の持ち主でした。卒業生の皆さんの中には、「名物ママの洗礼を浴びた」という方も、少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。

今となっては笑い話かもしれませんが、母が残した逸話の中にはこんなエピソードがあるんですよ。ある日、医学部の学生さんが店内で勉強をしていました。集中するあまり、時間がたったことに気付かなかったのでしょう。見かねた母は照明を落として、皮肉たっぷりにこう告げたのです。「目が悪くなるわよ!」。

店は30年ほど前に私が引き継ぎました。現在はコーヒー豆の焙煎やオムライスの調理など一人で切り盛りしていますが、アルバイトがいた頃は長大生の皆さんにお世話になっていました。医学部、薬学部、経済学部などいろいろな学部の学生さんが働いてくれましたが、早朝にイベント出店を控えていた前夜、寝坊しないように店の長椅子で寝泊まりしてくれた歯学部の学生さんのことはよく覚えています。また先日は、助教になった元アルバイト生がご家族を連れて遊びに来てくれました。こういったささやかな出来事が、日々の励みになっています。

SNSを通じてうわさが広がった開運オムライス。
「県外や海外のお客さまが増えました」と北川さん。

浜口商店街のメインロードに店を構えて65年。
こちらは懐かしい改装前の店舗。

店がある浜口商店街は、思案橋に次ぐ長崎第2の繁華街として活気あふれる町でしたが、コロナ禍を境にめっきり人通りが少なくなったように感じます。卒業生の皆さん、長崎を訪れた際にはぜひ浜口へ。時が止まったような店内で学生時代の思い出に浸ってください。おいしいコーヒーとオムライスを用意してお待ちしています。

若かりし頃の母・静和（しずわ）さん。

アンケートのご協力のお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

①面白かった記事　②本紙に対するご意見・ご感想
③今後取り扱ってほしい内容
④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
⑤本学とのご関係　⑥年齢　⑦氏名（ふりがな）
⑧郵便番号　⑨住所　⑩電話番号

◎はがき：〒852-8521　長崎市文教町1-14　長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156　◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2025年6月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード（500円分）をプレゼントします。賞品の発送は2025年7月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

Choho 直接送付サービス受付中!

広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「前号も読みたい」、「定期送付をしてほしい」といったお声をいただいております。そこで、ご指定の住所へChohoを直送するサービスを行っています。

上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

長崎大学SNSサイト

X　Facebook　Instagram　YouTube

訂正のお知らせ

前号に誤りがありましたので訂正します。
5ページ右下「魚の町」街区表示板のキャプション部分

（誤）魚の町（うおのまち）
（正）魚町（うおまち）

編集後記

最近はキャンパスを歩くと、留学生の姿をよく見かけます。それもそのはず。新型コロナウイルス感染症が流行していた時期に比べ、長崎大学に来る留学生の数は大幅に増えています。一時は、留学先にいた学生が帰国を余儀なくされることもありましたが、再び世界を行き来できるようになった今に、安堵と希望を感じます。

そこで今回は、「留学」の魅力や価値に改めて目を向けるため、海外へ飛び出した日本人学生、そして遠く海を越えて日本にやってきた留学生にお話を伺いました。

取材の中で感じたのは、留学とは、単に異国の地で学問を学ぶだけではないということです。新しい環境に飛び込み、自分の価値観を揺さぶられながら、仲間に出会い、時にはハプニングも乗り越えて、自らを高めていく経験そのものが留学の本質ではないでしょうか。

グローバル化が進む今、学生たちが国際的な視点を持ち、世界へ羽ばたいていくことは、未来にとって大きな財産になります。そんな彼らの挑戦を、皆さまにも温かく見守り、ご支援いただければ幸いです。

（広報戦略課 中村優花）

Nagasaki University Choho
Choho（チョーホー）Vol.87
2025年3月1日発行
Choho企画編集会議
長崎大学広報戦略本部
〒852-8521　長崎市文教町1-14
TEL：095-819-2007
長崎大学　検索
https://www.nagasaki-u.ac.jp/